

シリーズ・ビキニ被災60年

[／第五福竜丸以外にも](#)

[／原水爆禁止運動の原点／上／すぐに署名を始めた](#)

[／原水爆禁止運動の原点／下／被爆者の訴え聞いて](#)

[／第五福竜丸を語り継ぐ／静岡の高校・大学生](#)

[／第五福竜丸が伝えるもの／「水爆の時代」問う](#)

[／日本被団協の田中熙巳さん／久保山愛吉さんに誓う](#)

[／3・1集会初参加青年の思い／北海道山岸孝輝さん／福島市
尾形沙織さん](#)

[／被爆地の願い・広島／「原爆」刻めなかった](#)

[／第五福竜丸保存運動／核実験の「生き証人」](#)

[／第五福竜丸と「赤旗」／保存訴えた初の記事](#)

[\(TOP\)](#)

／第五福竜丸以外にも

1954年3月1日、木造マグロ漁船「第五福竜丸」が、太平洋・ビキニ環礁でアメリカの「キャッスル作戦」による水爆ブラボー実験に遭遇しました。広島、長崎に続く核兵器による被害で、原爆や水爆の禁止を願う運動が国民的規模に広がる契機になりました。ビキニ被災の真実はなにか。被災船と被災漁民の掘り起こしを30年以上続けている人が高知県にいます。「幡多高校生ゼミナール」顧問で、太平洋核被災支援センターの山下正寿さん（68）です。

(阿部活士) [\(TOP\)](#)

高知県宿毛市、内外の浦。山下さんが、「活動の原点」と呼ぶ港です。「マグロ漁船でビキニに行った」と名乗り出た数多くの乗組員と出会って、「被災者は第五福竜丸以外にもいると確信した」といいます。

二重被ばく

2月のある日、山下さんは、藤井節弥さんが眠るお墓に花をたむけ、手を合わせました。節弥さんは、掘り起こして明らかにした長崎とビキニで二重被ばくした青年です。ビキニ被災を苦に自殺、29歳でした。「第二新生丸」乗組員の岡本清美さんの妻、豊子さん(86)も訪ねました。

清美さんは山下さんに励まされ、1985年に宿毛市で結成した「ビキニ被災船員の会」の世話人でした。被災船員の会が県内に広がった矢先の99年に72歳で突然死しました。

1人ぐらしの豊子さん。口に出るのは、やはり夫の思い出です。「第二新生丸」は第五福竜丸と同じようにビキニで漁をしていたこと。清美さんら数人は違うマグロ船に乗り、ビキニより南のサモア諸島まで行きました。57年のクリスマス島核実験に遭遇したと話していました。

清美さんが生前、山下さんを仲間の墓に案内した話も出ました。「たたいても死ななような頑丈な者がマグロ船に乗った。なのに、次々に若死にした」と。

検証が必要

山下さんは、亡くなった第五福竜丸の無線長・久保山愛吉さんの「原水爆の被害者は私を最後にしてほしい」との言葉を引きながら、「しかし、本当は最初の被害者だった」と強くいいます。

「ブラボー実験は、マーシャル諸島での核実験の始まり。節弥さん、岡本さんをはじめ大勢の人が水爆実験の犠牲になった。60年の節目、太平洋核実験の被災者全体を視野に入れたビキニ被災事件として検証する必要がある」

突き止めた「のべ1000隻余の被災」

1954年3月1日、アメリカがビキニ環礁で強行した水爆ブラボー実験。第五福竜丸以外に、どれほどの被災船がいたのか。

厚生省公衆衛生局(当時)は、第五福竜丸が焼津港に入港した直後の1954年3月18日から、塩釜(宮城県)、東京、三崎(神奈川県)、清水(静岡県)、焼津(同県)の五つの漁港を指定して、魚の放射能検査を実施するよう指示。基準以上の数値が出た魚の廃棄処分も命じました。

執念の調査[\(TOP\)](#)

4、5月から放射能を含んだ雨が各地に降り、農作物を汚染したことが大きな社会問題となりました。5月から水産庁の指示で、大阪、室戸（高知県）、長崎など他の13港でも放射能検査をしました。

山下さんは、漁船と乗組員を具体的に追跡調査しました。

放射能に汚染された漁船はのべ1000隻をこえます。そのうち、高知のマグロ船がのべ270隻、3割にもなります。

被災海域でマグロ漁をしていた銀嶺丸と大鵬丸が、アメリカの占領下だった沖縄に入港。那覇港でアメリカ軍の放射能検査を受けていたことも突き止めました。

「事件後、韓国に売った被災船もあった」との聞き取り情報をもとに、2004年には韓国に調査にも行きました。日本から輸入されたマグロ船を探し出し、船員からの聞き取りもしました。

「被災乗組員の救済の道は見えないが、被災船が第五福竜丸以外にもたくさんあったという事実だけは世に示すことはできた」

山下さんは、30年間を振り返ります。

福島を見て

「ビキニ事件に似ている」。2011年3月11日に起きた東京電力福島第1原発事故への政府の対応をみて、山下さんが直感したことです。

「核と放射能被害について、国家は何をして、何をしないのか。福島の今後を考えると、ビキニ被災の実相を歴史から消そうとしたてん末を検証する必要がある」と指摘します。

当時、「原爆マグロ」が流行語となるなど、事件は水産業と飲食業界に大きな打撃を与えました。農水省は、水産業界への補償もにらんで調査船・俊鵲丸で5月から7月まで海洋検査をしました。ビキニ海域での放射能汚染が確認されました。

米国政府は、当初第五福竜丸を被災船どころか、水爆実験のスパイ船扱いをしていました。しかし、9月に無線長・久保山愛吉さんが亡くなり、原水爆禁止運動がいよいよ国民的な広がりをみせるなか、態度を急変。ビキニ被災漁民全体ではなく、水産業界と船主、第五福竜丸被害の補償で歩み寄ります。

アメリカの水爆実験「キャッスル作戦」が5月に終わった以降も、漁港の放射能検査で被災船は月を追うごとに増えていきました。にもかかわらず、日本政府は、港の調査を12月で打ち切る、マグロ放射能検査中止を12月28日に閣議決定。その1週間後

の55年1月4日に「二百万ドルの金額を、法律上の責任と関係なく、慰謝料として日本政府に提供する」とした交換文書をかわし、日米で政治決着します。

“国家犯罪、[\(TOP\)](#)

山下さんは、告発します。

「肝心の被災乗組員の健康調査を放置したままでした。被災者の生命や安全より、アメリカの核実験や『原子力の平和利用』として打ち出した原発開発を優先させたということでしょう。ビキニ被災の全体を明らかにしたら、国家財政をゆるがす莫大な補償問題が将来起きると国の指導者は考えたでしょう。それで、ビキニ被災の全容をうやむやにした日米の政治決着は、国家犯罪だと思います」

(2014年02月19日, 「赤旗」) [\(TOP\)](#)

／原水爆禁止運動の原点／上／すぐに署名を始めた

1954年3月、「第五福竜丸」がビキニ水爆実験で被災したことをきっかけに原水爆禁止運動が全国に広がりました。

東京都江東区の「第五福竜丸展示館」には当時の各地の署名簿がガラスケースで保存、常設展示されています。茶色く変色した手づくりの署名簿の束。縦書きあり、横書きあり。サイズも書式も多様です。毛筆やガリ版刷りしたもの。イラスト入りの用紙もあります。草の根で自発的に始めた意気込みが伝わってきます。

「仮連絡所 柴田方 東長崎原水爆に反対する会」と書かれた署名簿がありました。

「柴田方」とは東京都北区に暮らす柴田桂馬さんです。83歳になった今も原水爆禁止東京協議会（東京原水協）の代表理事を務めています。

「東長崎」といっても、長崎市内でなく、東京都豊島区の東長崎地域です。

反対する会

当時、柴田さんは23歳。体調を崩して自宅療養中でした。「死の灰」を浴びた「第五福竜丸」の船員が焼津港に、とのニュースが飛び込んできました。

「放射能の危険が現実の恐怖として迫ってきました。いてもたってもいられませんでした」

すぐに署名簿にある「東長崎原水爆に反対する会」を結成。若い母親や学生らがメンバーになりました。

「第五福竜丸」だけではありません。たくさんの遠洋マグロ漁船が塩釜（宮城県）、東京、三崎（神奈川県）、清水（静岡県）、大阪、鹿児島などの漁港を母港にしています。水揚げされたマグロは「原爆マグロ」と呼ばれて大量に廃棄されました。

5月には、放射能を含んだ雨が各地に降り、牧草や農作物などを汚染しました。

柴田さんらは東長崎地域の各戸を一軒一軒訪問しました。[\(TOP\)](#)

「魚が食べられない」「雨にあたったら髪の毛が抜けてしまう」。住民は、不安を口々に語りながら原水爆禁止の署名用紙に名前を書いたといいます。

「集めた署名をどうするのか」という声にこたえて、8月には原水爆禁止署名運動全国協議会が結成されました。柴田さんたちも全国協議会に署名の束を送りました。

9月23日、ビキニで被災した「第五福竜丸」無線長の久保山愛吉さん（当時40歳）が入院先の国立東京第一病院で亡くなりました。

23人の船員のなかで最年長。年老いた母親、妻と幼い3人の娘がいました。

「原水爆の犠牲者は私を最後にしてほしい」。久保山さんの最期の言葉です。

柴田さんたちは、追悼集会を開きました。久保山さんの肖像画を描いて遺影として掲げました。

「アメリカが、広島と長崎への原爆投下を反省することなく、水爆実験で人命を奪ったことへの怒りがこみあげた。久保山さんの思いと一つになりたかった」

船員が返書

各地の署名活動はさらに勢いを増しました。柴田さんがいまでも大切に保存している同会のニュース「げんばく まちのこえ」では、「原水爆禁止署名全国集計 12月14日現在 2008万4232」とあります。

柴田さんらはお見舞いとして、久保山さんの妻と、入院中の「第五福竜丸」漁労長の見崎吉男さんにも同会のニュースを送りました。

見崎さんからの返書が届きました。「ただ感謝の気持ちでいっぱいです。何の力もない私たちはひたすら心の奥で前途の幸を祈るのみです」とありました。

この返事を読んだ柴田さんは、「被災船員と気持ちが通じ合ったと実感しました。署名運動をやってよかったと誇りに思いました」。

（秋山豊）

（2014年02月21日，「赤旗」）[\(TOP\)](#)

/ 原水爆禁止運動の原点 / 下 / 被爆者の訴え聞いて

全国津々浦々で、労働組合や自治体などあらゆる分野・階層まで広がった原水爆禁止の署名行動は、いよいよ原水爆禁止世界大会を開く運動として大発展します。[\(TOP\)](#)

1954年12月までに2000万人以上の署名が集まったことをうけて、原水爆禁止署名運動全国協議会は翌55年1月、全国会議を開きます。そして「原水爆禁止世界大会」を8月に広島市で開催することを決定しました。

世界大会へ

原水爆禁止世界大会日本準備会が発足すると、大会に向けて署名運動と募金運動が一気に飛躍します。募金は1000万円集まったといわれます。

原水爆禁止世界大会には、全国から5000人の代表が参加しました。柴田桂馬さんが東京都豊島区で結成した「東長崎原水爆に反対する会」からも1人を派遣しました。豊島区の代表団は、区議会、婦人会、労組などから5人でした。

世界大会には、3158万3121人分（8月3日現在）を超える署名が集まりました。

9月には、原水爆禁止署名運動全国協議会と原水爆禁止世界大会日本準備会が統合し、原水爆禁止日本協議会（日本原水協）が発足しました。会則は、「本会は、世界の平和と人類の幸福のために、原水爆の禁止とこれに関連する運動を行うことを目的とする」（56年12月）としました。

柴田さんが参加したのは、長崎市で開かれた第2回原水爆禁止世界大会（56年8月9日）でした。当時は、世界大会用の臨時列車がでました。東京から長崎まで28時間の長旅でした。

「大会当日は、太陽が照りつけるととても暑い日でした。原爆が落とされたあの日もこんな暑さのなかで、と思うと胸が痛みました」

柴田さんは、被爆者の声を初めて聞きました。16歳で被爆し、下半身不随となった渡辺千恵子さんです。被爆者である母親に抱きかかえられながら、こう訴えました。

「幾度か死を宣告され、幾度か死のうとさえ思った私でしたが、母の愛にはどうしても勝つことができませんでした。10年間まったく顧みられなかった私たち被爆者は、昨年の広島大会で初めて生きる希望がでてまいりました」

4年ぶりに

柴田さんは、渡辺さんの言葉を胸に刻んで運動を続けてきました。[\(TOP\)](#)

「被爆者が踏みにじられた人間の尊厳とは何かを問い続けてきました。日米両政府は、原爆被害がなかったかのように戦後10年以上も被爆者を放置しました。核兵器の非人道性を訴えるとともに、被爆者を苦しめた日米両政府の責任を追及し続けなくてはならない」

83歳のいまも、原水爆禁止東京協議会（東京原水協）で活動続ける柴田さん。東京原水協は、2015年の核不拡散条約（NPT）再検討会議にむけ、活動の跳躍台になる「3・1ピキニデー」の諸行事（27～3月1日、静岡市、焼津市）に150人で参加しようと奮闘中です。柴田さんも意気込みます。

「ピキニ被災60年の節目なので、私も4年ぶりに参加します。原水爆禁止運動の原点を若い世代に伝えつつ、各地の『核兵器の全面禁止を求めるアピール』署名活動などを交流したい。世代を超えて、核兵器禁止条約交渉開始を求める大きな運動をつくりたい」

（2014年02月22日，「赤旗」）[\(TOP\)](#)

／ 第五福竜丸を語り継ぐ／ 静岡の高校・大学生

若者が探し出した元乗組員の新証言／西から太陽が上がった。響く爆発音。どんどん灰が船に…

高知の幡多高校生ゼミナールのようにピキニ被災の真実を知りたい。「平和のために地元で何かしたい」と静岡県の高校生や大学生が中心になって、10年前から活動してきた「エバークリーン藤枝」は第五福竜丸の元乗組員をさがしてきました。口を閉ざしていた元乗組員から新たな証言がうまれています。

（静岡県・内田伸治）

きっかけは、3年前に高知県の「幡多高校生ゼミナール」が焼津平和賞を受賞したことでした。幡多ゼミの活動を手本に、証言の掘り起こしをしました。岡崎航平さん＝大学2年生＝は、「米国による水爆実験で被災した船は高知県が多かったかもしれない。でも、発端となった第五福竜丸の母港の焼津市や静岡県内で調査がされないのが残念です。僕たちが乗組員の話聞いて語り継いでいかなくてはならない」と語りました。

証言をした元乗組員は、元操機手の池田正穂さん（81）と、元操舵手の見崎進さん（87）です。

米国の水爆実験

1954年3月、池田さんらが遭遇した太平洋・ピキニ環礁で米国による水爆実験と
は一。[\(TOP\)](#)

マグロ漁のため投げ縄作業をしてエンジンを停止していたときでした。「西から太陽が上がった」。船員たちが驚きの声をあげました。船室から飛び出した池田さんも、この光景を目にしました。[\(TOP\)](#)

すぐ揚げ縄（縄の回収）が命じられ、エンジンに油を送って動かすため機関場内に急ぎました。

「ドーン」という海の底から響くような爆発音。3時間ほどすると、真っ白な灰が降ってきました。どんどん船に積もっていきました。「エンジンにも灰が入り込み、機関場にいると気持ちが悪くなった」といいます。

「真っ白な灰」は、放射能を含んだ「死の灰」でした。池田さんは、「エンジンを冷やす水で習慣的に毎日体を洗っていた。これで、被害が軽く済んだのかもしれない」と振り返ります。

被災して一番ショックだったのが結婚を前提に付き合っていた女性が事件後、会ってくれなくなったことでした。テレビで女性たちが「乗組員とは一緒になりたくない」とインタビューに答えていました。このままでは結婚できないと京都に引っ越したと打ち明けました。

池田さんは、「私たちのような放射能被害をなくしたい。福島原発事故で放射能をあびた人たちが心配だ。核兵器も原発もいない」と訴え、若い人たちに伝えられてよかったと話しています。

福島の人と交流

「エバーグリーン」は昨年、東京電力福島第1原発事故による放射能被害が続く福島県南相馬市などへ行きました。フィールドワークをして交流してきました。第五福竜丸の元乗組員の話聞いた時は、原発事故でおきたことと重ねあわせて考えました。

長谷川倖友さん＝大学1年生＝は、「池田さんたちが漁をしてきたマグロが捨てられることになってしまった。福島でも農家や漁師から放射能被害による悲鳴を聞きました。以前は電力不足から原発が少しは必要かと思っていたけど、浜岡原発（御前崎市）のある静岡県でも起こりうることです。原発は、農家になりたいと思っている僕自身と、住んでいる地域を脅かすことがわかった。核兵器も原発も、得することはないムダなもの」といいます。

先に紹介した岡崎さんもいいます。「核兵器容認や原発推進の危険な安倍政権のもと、じっとしてはいけない。若者の活動で社会を変えられるということを広めていきたい」[\(TOP\)](#)

核兵器や原発にまったく関心がなかったという片ノ坂保澄さん＝高校3年生＝は、「水爆実験の被災者も原発事故に遭った福島の人たちも、どちらも放射能による被害。

被災後もさらなる苦しみを受けていることは悔しい。いろいろあるけど、核兵器や原発はなくすのがいちばんいい。音楽が好きなのでライブ会場でアピールするとかしていきたい」と話していました。

◇[\(TOP\)](#)

元乗組員の池田正穂さんは、「被災60年3・1ビキニデー集会」（焼津市文化センター、3月1日午後1時から）＝案内参照＝で話す予定です。

「3・1ビキニデー」主な行事

【日本原水協全国集会・国際交流会議】

27日午後2時半から。静岡グランシップ・会議ホール（静岡市）

【日本原水協全国集会・全体集会】

28日午後1時から。静岡グランシップ・中ホール

【関連行事・青年企画Ring! Link! Zero in静岡】

28日午後7時から。静岡グランシップ内

【「第五福竜丸」の乗組員、故久保山愛吉氏墓参行進・墓前祭】

3月1日午前9時半に行進出発（JR焼津駅南口集合）、午前10時半から墓前祭（弘徳院）

【被災60年3・1ビキニデー集会】

1日午後1時から。焼津市文化センター・大ホール

核兵器のない世界を願う人なら誰でも参加できます。問い合わせは、原水爆禁止日本協議会（日本原水協）^{TEL} 03(5842)6031まで。

（2014年02月25日，「赤旗」）[\(TOP\)](#)

／ 第五福竜丸が伝えるもの ／ 「水爆の時代」問う

広島、長崎、ビキニを経験した被爆国日本で、核兵器の惨禍をどう伝えていくかー。

「ビキニ事件を直接知っている世代が少なくなるなか、ビキニ事件で被ばくした第五福竜丸を展示し、その船が出合ったできごとを伝えていく使命がある」というのは、第五福竜丸平和協会の安田和也事務局長です。

戦後と漁業[\(TOP\)](#)

1945年8月15日、日本は戦争に負けて連合国、事実上アメリカに占領・支配されました。戦後は、「たんぱく質がたりないよ」との言葉がはやるように、モノ不足と食料難の時代でした。

安田さんが、各地の講演などで前置きとして触れるのは、この戦後日本のありようと漁業への期待です。

「動物性たんぱく質不足を補うため、漁業・水産業に期待がかかりましたが、連合国軍総司令部（GHQ）の命令で、当時、木造船しか造ることが許されなかった」と語ります。しかも、マッカーサー・ライン（日本漁船の活動可能領域）が設定され、日本近海での漁業しかできなかったと、安田さん。

第五福竜丸も47年、カツオ漁船として和歌山県で建造されました。全国で100トン未満の木造船がたくさん造られ、800隻余が活躍していました。

52年にサンフランシスコ平和条約が発効し、マッカーサー・ラインが撤廃されます。

安田さんは、「マッカーサー・ラインが撤廃されると、木造漁船をマグロ漁船に改造し、遠く赤道海域まで遠洋漁業に乗り出しました。その時期と合わせるように、アメリカは太平洋・マーシャル諸島で水爆実験を始めた」と指摘します。

54年には「キャッスル作戦」として5月まで6回水爆の実験をしました。「最初のブラボー実験で、第五福竜丸をはじめ日本の漁船が被災し、さらに続けられた実験で被害を広げた。汚染されたマグロを水揚げした日本漁船に乗っていた人は、1万人から2万人といわれる」といいます。

ちなみに、現在残っている木造船は、第五福竜丸だけです。「産業文化財としても貴重です。しかし老朽化がすすみ、保存のための補修も考えなくてはいけない」と安田さんは話します。

原発事故で

安田さんが講演などで強調しているのは、ビキニ核実験によって突入した「水爆の時代」とは何か、との問いです。

世界には1万7000発の核兵器が存在しており、現在進行形の問題です。東京電力福島第1原発事故から3年がたとうとしているいまも事故は収束しておらず、汚染水の問題などが深刻です。「どちらも、こんにちの世界の人びとが直面している問題です。ビキニ水爆実験と第五福竜丸の被災を通じて、一人ひとりが核の問題と向き合ってほしい」とのべます。[\(TOP\)](#)

「水爆の時代」がもたらしたものは、水爆の爆発によって吹き上げられた放射能が、地球上、世界にまき散らされ、アメリカ本土にも降り注いだことです。「核実験の被害は日本だけでないということを広く問題提起したい」と安田さん。[\(TOP\)](#)

第五福竜丸平和協会は、被ばく60年記念事業で、「ビキニ事件を知る本」を新たに出版し、水爆実験による被害が全国に広がったことを示します。放射能を含んだ雨は47都道府県すべてで降りました。記念事業では、記念のつどい（3月1日、日本青年館）や、連続市民講座（1回目は4月20日）も開きます。アメリカの「核爆発から身を守る」という教育映画なども上映し、核開発がいかにおぞましいものかを改めて考えます。

安田さんは、被災60年にあたり、訴えます。

「核兵器を持ち続けるのか、ピリオドを打つのかがいま、問われています。核不拡散条約（NPT）再検討会議も2015年に迫っています。広島、長崎の被害とともに、核開発のなかでどんなことがやられてきたのかに改めて焦点をあて、核兵器の非人道性を市民みんなで考えてみたい」

◇

記念のつどいや連続市民講座などの問い合わせは、第五福竜丸平和協会^{TEL} 03（3521）8494。

（2014年02月26日、「赤旗」）[\(TOP\)](#)

/ 日本被団協の田中熙巳さん / 久保山愛吉さんに誓う

放射能の恐ろしさを国民的に知らせるきっかけになった、1954年の第五福竜丸ビキニ水爆実験被災と、無線長・久保山愛吉さんの死亡―。被爆者はどう受け止め、行動したのでしょうか。

その一端を示す「寄せ書き」が、東京都江東（こうとう）区夢の島にある第五福竜丸展示館に保管されていました。

寄せ書きは、「久保山さんの霊に誓う」と題して、東大教養学部生活協同組合が遺族に宛てたものです。10人近い人が、思いを書いています。

そのなかに、「原爆にあい、近親を殺されたものとして、遺族の方と同じ悲しみと憤りを感じます。勇気を振り興し平和のため頑張りましょう 田中熙巳」とあります。

「田中熙巳」とは、長崎の被爆者で、日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）の事務局長を務める田中熙巳（てるみ）さん（81）です。[\(TOP\)](#)

アメリカは、45年8月6日の広島に続いて、9日には長崎に原爆を投下しました。田中さんは、爆心地から3・2キロメートルの自宅で被爆しました。13歳でした。奇跡的に無傷で助かりましたが、3日後には、親族を捜しに爆心地あたりを歩き回ります。[\(TOP\)](#)

遺体が散乱し、重傷のまま放置された人がいたところにいました。焼死体になった伯母やいところを発見します。

もう一人の伯母を野原で荼毘（だび）に付したときは泣き崩れたといいます。身内5人の命が一挙に奪われたのです。

意識が芽生え

田中さんは、「寄せ書きを書いたことは忘れていた」といいながら、「たしかに『原爆にあい』と書いている。驚きました。当時は『原爆』どころか『長崎出身』ともいってなかったから」と、記憶をたどります。

「病気にもならなかったので被爆者としての自覚はありませんでした。母子家庭で極貧の生活。とにかく生きるために精いっぱいでした」と田中さん。母親を助けようと、長崎にいたときも、上京後も、アルバイトや仕事をしながら大学進学をめざしていました。

寄せ書きにある東大生協では、組織をあげて浅間山ろく軍事演習反対といった基地反対の平和運動や、ビキニ事件後は原水爆禁止の署名運動に取り組んでいました。

水爆の犠牲になった久保山さんの死亡は特別でした。

「父親をなくした遺族への同情心と同時に、原水爆への憤り。被爆者としての意識が初めて芽生えたかもしれません」

1955年に広島市で初めて開かれた原水爆禁止世界大会は、運動の目標に「原水爆の禁止」と「被爆者救援」を車の両輪として位置づけました。

この原水爆禁止運動に励まされ、支えられて、56年に長崎市で開かれた第2回の原水爆禁止世界大会に参加した全国の被爆者によって、日本被団協が8月10日に結成されました。「かくて私たちは自らを救うとともに、私たちの体験をとおして人類を救おうという決意を誓い合ったのです」と世界にむけてあいさつしました。

田中さんも、大学に入学した年で帰郷して、この世界大会に出席しています。被爆者というより「長崎の人間として、やらないといけない」という気持ちでした。

その後、被爆者を自覚する“事件”が起きました。長崎の友人が白血病で亡くなったと週刊誌に載ったことです。[\(TOP\)](#)

「がく然としました。被爆した状況は同じで、病気らしい病気をしていなかったのに。私も被爆したことを自覚しました。けががなくても放射能をあびていたんです」。結成直後の東友会（東京の被爆者団体）に入り、被爆者運動にかかわり始めます。

廃絶で決着へ [\(TOP\)](#)

「みなさんが写真でしばしば見る広島と長崎の原子雲の下は、灼熱（しゃくねつ）地獄のつぼと化し、数知れぬ人間が苦しみでのたうち回っていたのです。これほど人道に反することはあるでしょうか」

日本国内だけでなく、国際会議でも、自身の被爆体験を織り交ぜながら、核兵器の非人道性を告発し、その廃絶を訴え続ける田中さん。被爆70年で、核不拡散条約（NPT）再検討会議が開かれる2015年にむけ、「廃絶で決着をつける」意気込みで走り続けます。

（阿部活士）

（2014年02月27日，「赤旗」） [\(TOP\)](#)

[/ 3・1集会初参加青年の思い / 北海道山岸孝輝さん / 福島市尾形沙織さん](#)

世界動かす運動に感動・北海道山岸孝輝さん / 放射能被害なくしたい・福島市尾形沙織さん

アメリカのビキニ水爆実験でマグロ漁船第五福竜丸などが被災して60年。「2014年3・1ビキニデー集会」（静岡市、焼津市、2月27日から3月1日）には初めて参加する青年たちがたくさんいました。ビキニ事件の実相を学び、核不拡散条約（NPT）再検討会議が開かれる2015年にむけ、「核兵器全面禁止のアピール」署名を地域から広げようという思いにあふれていました。

（秋山豊） [\(TOP\)](#)

北海道旭川市から初参加した山岸孝輝さん（26）。昨年11月、安倍政権が強行成立させた秘密保護法などに反対するデモに参加したのがきっかけで平和問題に関心を持ちました。

ビキニデー集会を前に、北海道原水協の仲間と東京・夢の島の第五福竜丸展示館を初めて訪ねました。

「第五福竜丸だけでなく、のべ1000隻もの船が被災したことを知りました。多くの漁師が放射能で病気になり、仕事を続けられなくなった。マグロも捨てなければいけなかった。偏見や差別で故郷を追われた人もいる。海が好きで漁師になったのに…」

展示されていた原水爆禁止の署名用紙の束にひきつけられたといいます。署名はビキニ事件が起きた1カ月後の1954年4月から始まり、全国に広がりました。55年に広島市で開かれた第1回原水爆禁止世界大会では3000万人の署名が集まった事実が報告されました。[\(TOP\)](#)

「3000万人の署名ってどれくらいの束ができるんだろう。核兵器廃絶の運動は、血のにじむ努力で世界を動かしてきたんですね。僕も、脈々と続く歴史的な運動に参加していることに感動しています」

山岸さんは1日、ビキニ事件直後に、東京都豊島区で原水爆禁止署名を始めた柴田桂馬さん（83）に会いました。柴田さんは、笑顔で語りかけます。

「若い人が核兵器廃絶のためにがんばってくれるのは頼もしい。若いうちに力を発揮し、社会発展のために力になってほしい。積極的に働きかけることが大事だよ。お互いがんばろう」

山岸さんは、柴田さんの手を力強く握りかえました。

ビキニデー関連行事「核兵器なくそう青年交流集会Ring! Link! Zero 2014」（2月28日夜）には80人が参加しました。福島市で社会福祉士をしている尾形沙織さん（26）は、6年ぶり2度目の参加です。初めて参加したのは大学3年生のときでした。東京電力福島第1原発事故の前でした。

「以前はビキニデーに参加しても、核兵器や平和の問題を漠然と考えていました。でも、原発事故を体験して、もっと早く核兵器と原発をなくす運動に力を入れていればよかった。後悔しています」と語りました。

尾形さんは、第五福竜丸の元乗組員、池田正穂さんの証言に、原発事故後の福島を重ねていました。

池田さんの家は、あんこ屋を営んでいました。あんこを買った客が川に捨てている姿を見たといいます。

尾形さんの自宅は、家族が食べる分だけの野菜と米をつくっています。事故直後、野菜を検査すると放射線が測定されました。落ち込んだ家族の顔を忘れられません。

「福島の野菜や食べ物が敬遠されるのは切ない。福島の事態は、ビキニ事件の差別や偏見と重なります。放射能の被害は60年前でなく、いま起きている問題です。2015年、一人ひとりの思いを込めた多くの署名を国連に届けたい」

（2014年03月04日、「赤旗」）[\(TOP\)](#)

/ 被爆地の願い・広島 / 「原爆」刻めなかった [\(TOP\)](#)

被爆地・広島、爆心地に近い平和公園。平和大橋西詰めに、「原爆」や「慰霊」の文字もない、一風変わった碑があります。「 $E=MC^2$ 」との記号がある箱を持つ少女と両側から見つめる少女をかたどった碑。広島市立第一高等女学校（市女）の「慰霊碑」です。

軍都だった広島。本土決戦に備え、東西約4^{キロ}、南北100^{メートル}幅の防火帯をつくる建物疎開作業に、中学、女学校の1、2年生まで動員しました。

「引率の先生7人と生徒で542人が全滅しました。ここに立つと、1年半しか一緒にいなかったけど、いまでも顔を思い出します」

こう話すのは、当時2年生だった矢野美耶古さん（82）。あの日、たまたま、おなかが痛くなって作業を休み、爆心地から4^{キロ}離れた宇品（うじな）の自宅で被爆しました。

「なんで死ななかったのか。ずっと社会に背をむけて生き残ったことをうらめしく思っていた時期もあった」と矢野さん。

「悔しさ」伝え

新日本婦人の会に出会い、閉ざした気持ちを乗り越え、「戦争のなかでしか生きられなかった同級生の悔しさ」を若い世代に語ってきました。

核兵器の非人道性はもちろん、戦後の苦労、詩人の峠三吉らアメリカの占領政策に屈しないたたかいも…。

「碑は、三回忌に学校内に建てました。まだ占領下で米軍によるプレスコード（報道規制）で『原爆』という言葉を使えなかった。『 $E=MC^2$ 』という原子力エネルギーの公式で、原爆の犠牲を表しました」

アメリカは1947年、ABCC（原爆傷害調査委員会）を広島と長崎に設置しました。矢野さんは、「いやだった」ABCCへの思いも話題にします。

近所のお姉さんが産んだ赤ちゃんが原因不明で死亡したときでした。ABCCへ解剖に回されました。全身を包帯でぐるぐる巻きにされ、目と口だけがあいて返されてきた、といいます。

当時、学校にもABCCから片言の日本語を話す2世がやってきて、授業中でも名前をよんで連れて行かれました。「ひどい目にあった」と泣きながら話した友だち。裸にされて、頭と手だけ出る袋みたいなものを着せられて、四方八方からレントゲンを撮られたといいます。 [\(TOP\)](#)

「体を調べても病名はいわない、治療もしないＡＢＣＣ。原爆が人体にどう影響するのか長期的に調べるため、被爆者は『モルモット扱い』でした」[\(TOP\)](#)

今こそできる

「ビキニ海域での第五福竜丸事件をきっかけに、原水爆禁止を世界に求める運動が広島・長崎から全国に広がったことは、被爆者を勇気づけたと思います」

矢野さんは、神田神社の宮司（ぐうじ）をしていた父親の思い出に触れながら、強調します。

父親は、広島で開かれた原水爆禁止世界大会に１回目（１９５５年）から宗教者として出席していました。宿泊施設があまりない時代。参加者はお宮に宿泊していた時期もありました。

それから６０年。広島県被団協のひとりとして、国際会議にも出席してきました。いまほど被爆者の願いと世界の思いが通じることはないと考えています。

「昨年『核兵器の人道上的影響に関する共同声明』に１２５カ国が賛同しました。今度こそできるんじゃないかと思う。生きているうちに『核兵器がなくなった』という声をききたいです。そのために私のできることはやりたい」

矢野さんら被爆者の願いをまっすぐに受け止めて、活動しているのが２世たちです。

その一人、広島県被団協事務局次長（平和学習担当）の大中伸一さんは、修学旅行の高校生らを相手に平和公園周辺の前爆遺構や前爆碑を案内しています。平均で年間１３０回、のべ２０００人と一緒に碑めぐりします。

大中さんは、「平和の種をまく」と思って語っているといます。「広島の前状と被爆の実相。戦争はいらぬという平和への願い。見学した人それぞれが自分の言葉で語って広げてくれたら、うれしい。ことしはビキニ被災６０年、来年は被爆７０年の節目です。ますますがんばりたい」

（阿部活士）

（２０１４年０３月０５日、「赤旗」）[\(TOP\)](#)

／ 第五福竜丸保存運動 / 核実験の“生き証人”

マグロ漁船・第五福竜丸は、１９５４年３月１日、アメリカのビキニ水爆実験で被災したのち、数奇な運命をたどります。はやぶさ丸と名前を変えられ、東京水産大学練習船になり、東京・夢の島の廃船場に打ち捨てられていました。第五福竜丸を沈めようとした日本政府。６７年に朽ちかけた船を発見し、保存運動をした人たちがいました。

ボロボロの船(TOP)

現在、原水爆禁止東京協議会（東京原水協）の代表理事を務める青木佳子さん（84）もその一人です。

「どうも第五福竜丸が夢の島に捨てられているらしい」。67年の初夏、夢の島がある江東（こうとう）区の教員でつくった「江東教師平和の会」の仲間からこんな話を聞きました。自転車を走らせた青木さんは、傾いたボロボロの船を見つけます。「第五福竜丸だとしんじられませんでした」。

仲間たちと「何とか残したいな」と話し合っていた矢先の68年3月2日のことです。「赤旗」が「`死の灰、かぶった第五福竜丸が沈められそう」と伝えました。これがきっかけで保存運動が発展します。

青木さんの呼びかけで、「平和の会」の仲間をはじめ、地域の建設職人、工場労働者、都や区の職員らが集まりました。最初は、船内にたまった泥をバケツでかき出しました。かき出しても、また泥水がたまって浸水する、その繰り返し。

やっと泥かきが終わるとデッキブラシで操舵室からトイレまで船内すみずみを磨きました。壊れた部分を応急修理。船体のペンキも塗りなおしました。街頭では、保存募金や署名を訴えました。

「第五福竜丸は、アメリカによる水爆実験の被害を語り継ぐ生き証人です。絶対に沈めるわけにいなかった」

68年8月、青木さんは、東京で開かれた原水爆禁止世界大会の全体会で1万人の参加者に保存を訴えました。分科会では「第五福竜丸を見る集い」の案内役も務めました。

市民の熱意に応じて69年7月、「第五福竜丸保存委員会」が発足。船名を、はやぶさ丸から第五福竜丸に書き換える刻名式が70年2月に開かれました。青木さんも参加しました。

76年、夢の島に、第五福竜丸展示館が開館しました。青木さんは定年退職後、10年以上ボランティアガイドを務めました。

東京水産大学で、「はやぶさ丸」に乗っていたという男性を案内したことがあります。「第五福竜丸とは知らなかった」といわれたとき、痛感しました。「この船を沈めていたら、ビキニ事件の真相は永久に隠されていた」と。

「第五福竜丸を保存できたことは、核兵器廃絶の運動を広げる大きな力になってきました。ビキニ被災から60年。若い人たちにビキニ水爆実験の真相を語り継ぎ、原水爆禁止の運動を大きく広げたい」

被爆体験聞き(TOP)

青木さんには、どうしても第五福竜丸を残したいわけがありました。教員になったのは戦後まだ間もない49年のことでした。

夏休みに開かれた研修会。当時占領下で、アメリカのプレスコード（報道規制）によって「原爆」などが表だっていえないなか、長崎の女性教員が被爆体験を告白したのです。

女性教員は、爆心地から数百mで被爆。大やけどを負って意識不明の重体が3日間も続いたといいます。

「夫は、爆心地から離れていたため無傷でした。でも、私を懸命に看病してくれた数カ月後、体中から血を噴き出して亡くなりました。私は生きているのに…」

被爆者の言葉に、青木さんは唇をかみしめました。

「原爆の放射能は、熱線や爆風に巻き込まれずに生きのびた人も苦しめ、命まで奪うことを知りました。核兵器は一発も残してはなりません」

（秋山豊）

（2014年03月12日，「赤旗」）[\(TOP\)](#)

/ 第五福竜丸と「赤旗」 / 保存訴えた初の記事

「“死の灰” かぶった第五福竜丸が沈められそう “夢の島（東京）” ゴミ捨て場に船名もかわり転売の果て」

1968年3月2日。「赤旗」日刊紙の社会面トップに、東京湾に捨てられ、白い船体を傾けて係留されている第五福竜丸を大写しにしたモノクロ写真と記事が掲載されました。記事には、こうあります。

「十四年前の三月一日、アメリカのビキニ水爆実験で被爆した静岡県焼津のマグロ漁船第五福竜丸（当時九十九ト、木船）が、現在、東京湾の『夢の島』に廃船としてつながれており、引きとり手もないまま、ことし夏ごろまでには、夢の島に隣接した十五号埋立地（ゴミ捨て場）に埋められようとしています。三・一ビキニデーを迎えたい『日本と世界の原水爆禁止運動』にとって絶対に忘れることのできないこの船を、ゴミ捨て場に沈めてしまうなんてひどすぎる。広島原爆ドームのようになんとか保存する方法はないものか』との声の関係者の間からもおこっています」

第五福竜丸が沈められそうになっている事実を社会に伝えた初めての新聞記事でした。

ゴミ捨て場に[\(TOP\)](#)

このトップ記事を皮切りに、休みなく報道を展開したのは社会部の白井千尋（しら・ちひろ）記者でした。[\(TOP\)](#)

白井記者は第五福竜丸を発見したときの状況を手記に残しています。（『第五福竜丸を最も愛したジャーナリスト』に所収）

68年初め。夢の島から発するハエの大群などの問題取材して回っていた白井記者は、東京港の港湾労働者や平和運動にたずさわる労働者から「夢の島のゴミ捨て場に第五福竜丸が捨てられている」と教えられました。

白井記者は、延々と続くゴミの丘、悪臭とほこりのなかを現場近くまでたどり着きました。ゴミの山かげで昼の弁当を広げていた労働者にたずねると、ゴミの山に登って「あれだよ、あの白い木造船だよ」と親しみを込めた口調、表情で教えてくれました。

第五福竜丸のまわりには何隻もの大きな木造船や鉄船が捨てられ、「船の墓場」といわれていました。ゴミの海に足をとられ、泥だらけになりながら、白井記者は第五福竜丸の傷ついた船体を調べて回り、メモを取り、カメラに収めました。

「言い知れない怒りで胸がいっぱいになった。被爆国日本の政府である筈（はず）の自民党政府は、世界に一つしかない水爆被災の証人ともいえるこの船を、手厚く保存し、原水爆禁止を世界に訴える代わりに、これをゴミの海に放置し沈めようとしていたのだ」と記しています。

展示館が開館

白井記者の記事はすぐに大きな反響を呼び、各地で永久保存のための運動が巻き起こりました。一般紙もあとを追って報道し、美濃部亮吉都知事が保存への協力を表明。船を守ろうという幅広い市民の熱意が実り、8年後の76年6月10日、第五福竜丸の船体をおさめた東京都立第五福竜丸展示館が開館しました。

第五福竜丸は54年のビキニ被災後、国に買い取られ、国は東京水産大学（現在の東京海洋大学）の練習船に改造。船名も「はやぶさ丸」に変えられて10年間ほど使われました。その後、廃船処分で民間に払い下げられ、転売のすえ、夢の島に捨てられました。

白井記者は第五福竜丸のある現場まで毎日のように通いました。展示館が開館したのちも、自転車に乗って自宅や職場から1時間半かけて通いつめました。

白井記者は23歳だった50年、原子力兵器の無条件禁止を要求する「ストックホルム・アピール」署名にとりくんだことを理由に宮城県立水産高校の教諭をレッドパーズされました。その後、日本共産党の専従活動家になり、60年に赤旗記者になりました。88年の定年退職後も非常勤として記者活動をつづけ、93年に65歳で亡くなるまで第五福竜丸に心血をそそぎました。[\(TOP\)](#)

(大野ひろみ)

(このシリーズは、2月19、21、22、25、26、27日、3月4、5、12
日付に掲載しました)

(2014年03月13日, 「赤旗」) [\(TOP\)](#)